



主張

## 進路指導は生き方指導

### 「中学校は、未来の私の出発点」

渡 邊 聡

本校の玄関には、キャッチフレーズとして「はいちろう襟中は未来の私の出発点！」という言葉が掲げられています。この言葉には、中学校生活は自分の未来に続くもので、今の努力が自分の未来をつくるという意識で日々を大切にしたい、という思いが込められています。中学校教育は義務教育の最終段階を担っており、多くの中学生にとって、恐らく生まれて初めて、実感をもって自らの進路に向き合い、日々の学校生活と将来の生活や職業を関連させて考え始める時期にあたります。そして、全日中教育ビジョンの基本的な考え方に述べられているように、「将来をたくましく生きていく基礎を培い、それぞれの分野で活躍することのできる基礎となる力」を身に付けて、「現実的探索と暫定的選択」によって自ら定めた進路先へと巣立っていくのです。言い換えれば、中学校における教育活動の全てが、広い意味の進路指導に収束されていくこととなります。進学、就職、受験といった指導は、こうした進路指導のほんの一部にすぎません。各中学校の現場においては、こうした認識のもとで、入学から卒業までの全教育活動を通して、生き方指導としての進路指導に日々尽力されていることと思います。

一方、次期学習指導要領策定に向けての審議のまとめなどでは、現代社会は、加速度的



に進むグローバル化や高度情報化によって、複雑で予測困難な時代であると言われていきます。今の子供たちの半数以上が将来今はない職業に就くという予測や、三〇年ほどのうちに、人工知能が人類を越えるという指摘も紹介されているほどです。今の中学生はこうした時代を生き抜いていかななくてはなりません。そのような中で、中学校の進路指導はどうあったら良いでしょうか。

平成二十三年に出された、「キャリア教育・職業教育の在り方」についての中教審の答申では、それまでの、「児童生徒の職業観・勤労観を育む」ことに加えて、「社会的・職業的自立のために必要な基礎的・汎用的能力の育成」が必要であるとしています。これは、決して職業観・勤労観の育成を軽視してよいということではないと思います。汎用的能力を育てることは、子供の職業的発達を促すことにもなるはずです。若年層の無就業など、雇用形態の流動化や多様化等によって生じている課題も浮かび上がっていることを思うと、健全な職業観・勤労観を意図的に育てていくことの必要性は、むしろ高まっていると感じます。あらゆる教育活動を通して、これからの時代を生きていく子供たちに必要な、様々な能力を身に付けるとともに、職業に貴賤のないことや、いわゆる職業の三要素（経済性・社会性・個人性）、働くことの苦勞ややりがいなどを、地域社会や家庭と連携しながら、できるだけ体験を通して感得させる必要があると思います。

本校でも毎年、二年生が三日間の職業体験活動を行っています。「働くということ」は簡単ではない。でも、がんばった後のやりがい、達成感は今までに感じたことのないものだった。」これは本年度職業体験を終えた後の、一人の生徒の感想です。

（全日中副会長・静岡県牧之原市立榛原中学校長）